
ぼくは雑草。

小野宮 夢遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくは雑草。

【Nコード】

N93750

【作者名】

小野宮 夢遊

【あらすじ】

ぼくは、雑草。

名前も分らない、花も咲かない、ただの葉だけの雑草。

なぜ、ぼくは生きているの？

ひとつの植物の思い。

ある日、雑草の生き方が変わるような出来事が訪れる――――。

>i30035—3862<

ぼくは、雑草。

名前も分からない、花も咲かない、ただの葉だけの雑草。
みんなに嫌われて生きている。

なぜ、ぼくは生きているのだろうか。

いつも思う。

ぼくなんて、生きる価値なんかないのに。

ぼくなんて、みんなに嫌な思いしかさせないのに。

なぜ、ぼくは生きているの？

ぼくは、死ねない。

引っこ抜かれても、また生えてきてしまう。

ぼくは根が深いから、うまく抜けないんだ。

ごめんなさい。

いつも思う。

抜けなくて、ごめんなさい。

死ななくて、ごめんなさい。

毎回抜けないたびに、繰り返し、繰り返し。

なぜ、ぼくは生まれてきてしまったのだろうか。

なぜ、ぼくを生んだの？

いつも思う。

だれも、ぼくなんか必要としないのに。

ただ、じやまなだけなのに。
親も、神様も、だれもないから聞けないけど。
ぼくは、いるはずのないだれかに問いかける。
なぜ、ぼくは生まれてしまったの？

そんな、ある日のことだった。
ぼくのとなりに、黄色いたんぽぽが咲いた。
きれいな黄色い花を持つ、明るいたんぽぽが。
彼女は、光に照らされればその美しい黄色い花を輝かせ、風に吹かれれば、その細い体を揺らした。
ときどき見せる、明るい笑顔。
その笑顔にぼくの心はどきんと揺れ、同時に憎く、ねたましく思った。

「花、きれいだね。」

ある日、ぼくは彼女に言った。
すると彼女はにこっとほほ笑んで、

「ありがとう。」

そうぼくに向かって言った。

ぼくは、そんな彼女に複雑な感情をいだいた。

そして、顔にやるせない表情を浮かばせる。

彼女はそんなぼくの様子を見ると、今度は空をあおぎ見て、初めて悲しそうな顔をした。

「でもね、お花があってもいい事なんかないよ。」

「だって、種ができるもの。」

「たくさん種を飛ばすから、私たちも、みんなに嫌われるの。」
そういう彼女の顔からは、笑顔が全部消えていて、代わりに花びらに光るものがあった。

「でもね、それでも私たちは、深く根をはって生きてる。」

「一生懸命に生きてる。」

「どんなにみんなに嫌われたって、それでも頑固に生き続けるの。」

「ねえ、どうして？なんでそんなにがんばって生きてるの？」

そんな彼女にぼくは聞いた。

そしたら彼女は、花びらにきらりと光るものを持ったまま、また明るい笑顔になって、ぼくに言った。

「生きているから生きている。」

「生きているものに、必要ないものなんていないのよ。」

「きっと今、私たちが生きているのはなにか理由があるはずだから、その答えを見つけられるようにできるかぎり精一杯、終わりが来るまで生きなくちゃ。」

彼女はぼくにほほ笑んで、そう自信を持って言った。

そのとき、彼女の花びらから光るものが一滴こぼれ落ちて、茶色い地面を少しぬらした。

それからしばらく時間が経ち季節が変わると、彼女もその花の色を変えた。

きれいな黄色い花から、ふわふわやわらかな真っ白いわたげに。やっぱりそんな彼女のこと、ぼくはきれいで美しいと思った。

「わたげ、きれいだね。」

ぼくは彼女に言った。

すると彼女はにこっとほほ笑んで、

「ありがとう。」

そうぼくに言った。

ぼくはそんな彼女に、今度は本当に心がどきんと揺れた。

そんなとき、風が吹いた。

その風は、彼女のわたげをさらっていった。

「もう、お別れだね。」

「また会える日まで、さようなら。」

そう言って、彼女は風に吹かれて飛んでった。

いつか彼女があおぎ見た、その大きな青空へ。

風に乗ってふわふわと、気持ちよさそうに飛んでいった。

ぼくはそんな空を見て、彼女の言ったことを思い出した。

「生きているから生きている。」

「生きているものに、必要ないものなんていないのよ。」

その言葉の中に、ぼくはやっと答えを見つけた。

そのときぼくは、ぼくの中の何かが軽くなった気がしたんだ。

ありがとう。

そう空につぶやいて、ぼくは初めてにこっと笑った。

それから、彼女はもうあの笑顔を見せなかった。

彼女は茶色くなって、地面と一緒になくなっていった。

けれど、ぼくは信じてる。

いつかまた、あの笑顔を見られると信じて。

ぼくは、雑草。

名前も分らない、花も咲かない、ただの葉だけの雑草。
みんなに嫌われて生きている。

だけど、ぼくは一生懸命生きている。
深く根をはって生きている。

生きているから、生きている。
今度は、彼女のように堂々と。
自信を持って生きている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9375o/>

ぼくは雑草。

2011年11月16日19時54分発行